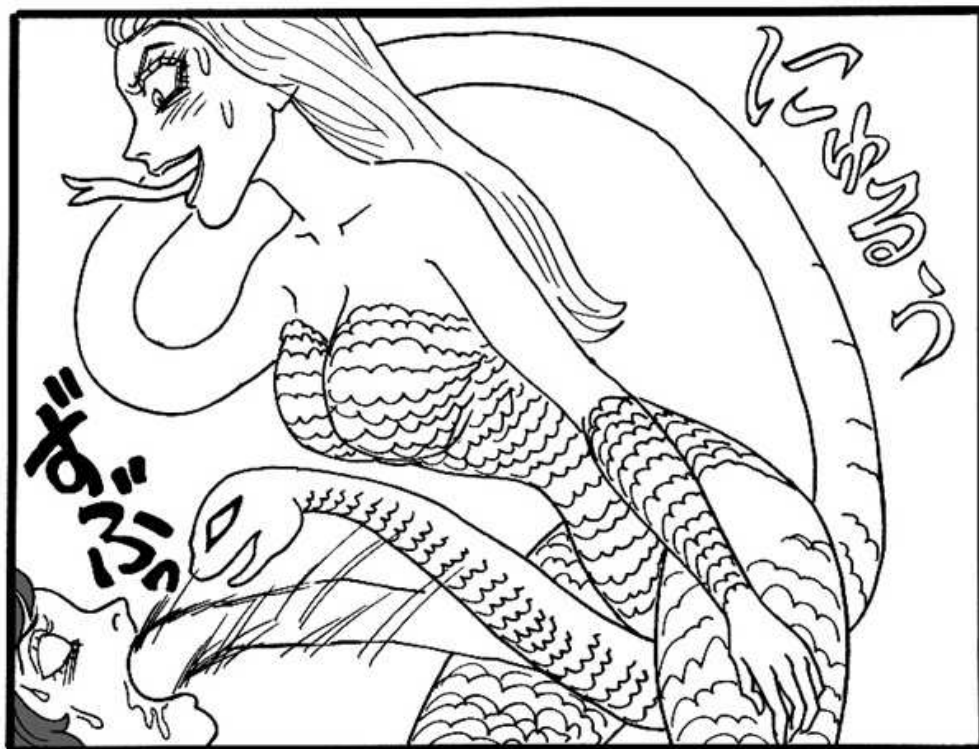
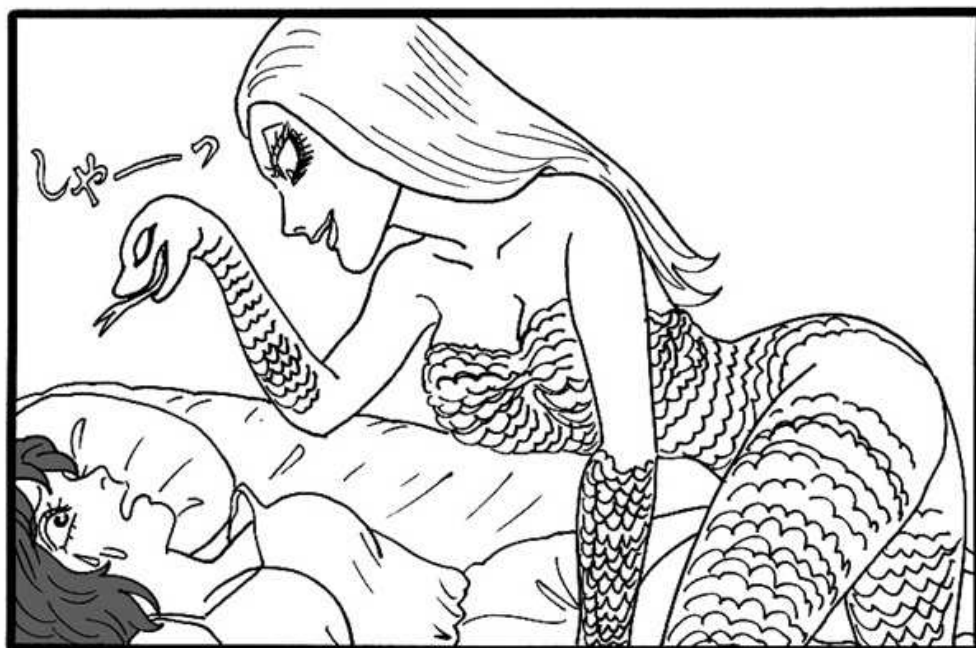


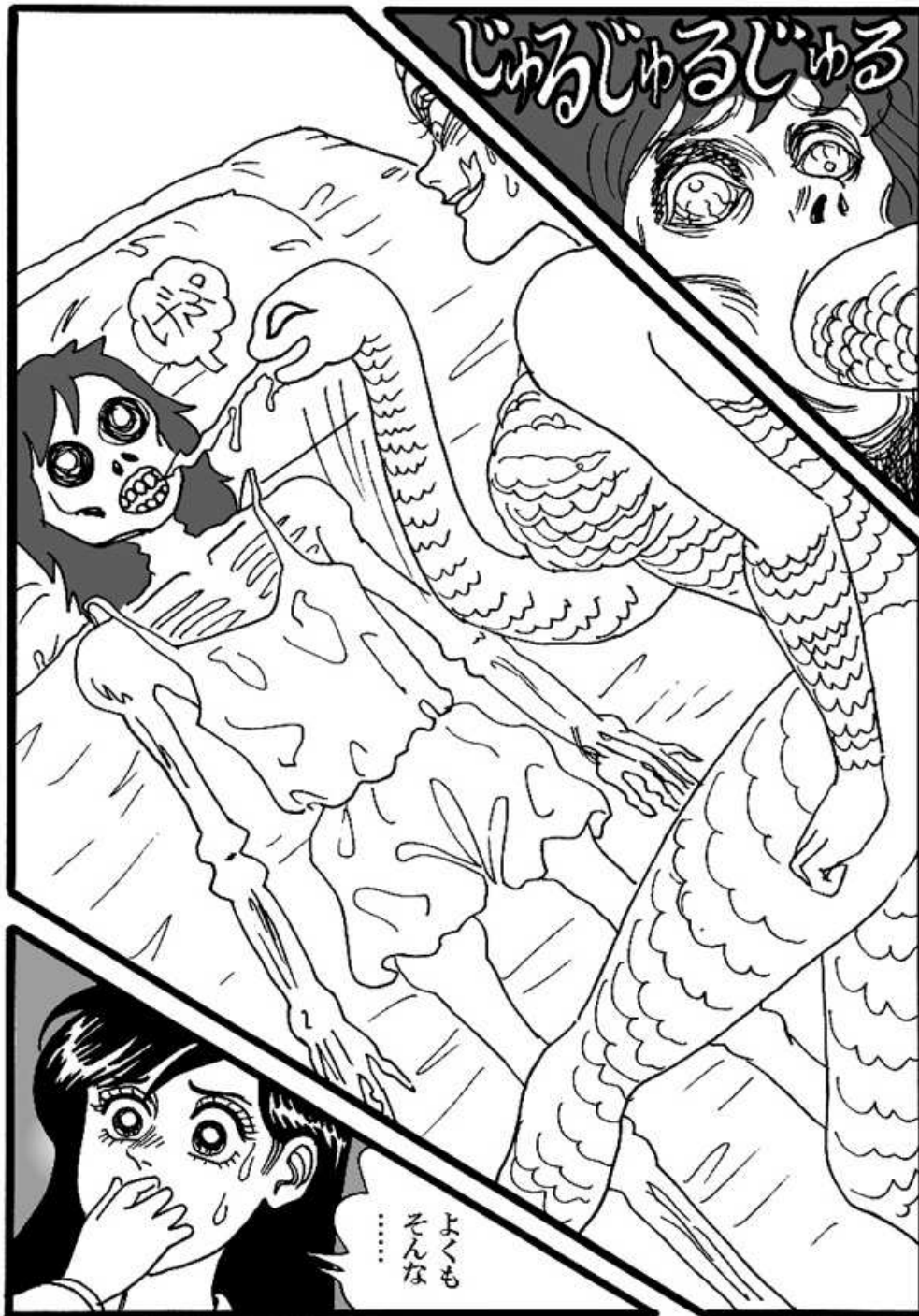
闇からの魔手 その15

タミー・タッカー捜査官が宿泊しているホテルの部屋で、タミー・オロチはベッドの上に横たえた若い女性の身体の上に馬乗りになっていた。右手が蛇の頭部に変化してはよろよろと鎌首を伸ばし、女性の口に侵入した。女性は見る見るうちに干からびてミイラとなって息絶えた。

「よくもそんな……」

ドアの前に珠美の姿が現れ、彼女は無残な光景に眉を顰めた。





「来たわね、タマちゃん」

女性の遺体から腕を引きちぎって、タミー・オロチはバリバリムシャムシャと骨ごと嚙り付いた。

「魂と生体エネルギーを全部吸い取った後の人間の干物も結構いけるわよ。ワインにとってもよく合うの。タマちゃんもどう？」

「冗談じゃないわよ！」

珠美は怒声を発した。

「あ、そう。じゃあ遠慮なく残りは私が」

と言って、タミー・オロチは大口を開けて遺体を丸飲みにした。



「ふー、御馳走様……」

グラスのワインを飲み干した。

「やっぱり私は三十路のタマちゃんの方がいいな。大人の女性が好みなんだ」

ドアの前から動かない珠美の若々しい身体を上から下まで眺め回しながら、タミー・オロチは舌なめずりした。不老不死である『半霊半物』の諫波衆の肉体は、二十歳の状態を完成形として定着する。故に、仮に子供の時に『扉』を通過した場合でも、成人するまではほぼ普通で成長するので、永遠に子供のままといいことはない。

「こうなったのは誰のせいよ！」

こいつを目の前にしていると、気が荒れてならなかった。

「でもまあ、タマちゃんはタマちゃんだもんね」

先端が二股に分かれた舌がビロ〜んと伸びて、珠美の胸の辺りを掠めると、ジャケットのボタンがちぎれ飛び、シャツが破れて胸の谷間が露になった。

「ほ〜んと、食べてしまいたいくらい可愛いわあ」

いつの間にか珠美の背後に回って、彼女の乳房を摩るように揉みしだいた。

「ひええ〜っ!?!」

悪寒が走り抜けて珠美は悲鳴を上げた。胸の間から腹の辺りの皮膚に鱗状の痣のようなものが浮かび上がったのだ。



「やめんか！」

珠美はタミー・オロチの両手を振り解いて飛び退いた。

「なんちゅーおぞましいことを……！」

不快感は身内に残っているが、痣はすぐに消えてしまった。

「冷たいじゃない、タマちゃん。もっと気持ちよくしてあげるのに」

身体をくねらせるタミー・オロチ。まさに蛇の化身だ。

「黙れ！ タミーの顔と声でイヤらしいことを言うな！」

ぶるぶる震えながら、怒り心頭に発して珠美は叫んだ。

「私の大好きなタミーは、断じてそんなふしだらな女なんかじゃない！ 貴様なんか、貴様なんか……！」

後は言葉にならず、涙が滲み出るままに身を震わせた。大切なものを汚されて、無性に腹が立って仕方がなかった。このツインルームには珠美も泊めてもらったことがある。タミーと二人、二つのベッドにそれぞれ潜り込んで、夜が更けるのも忘れていろいろなことを語り明かした思い出の場所。それをこのゲテモノは猥雑な薄汚い言動で嘲弄し踏み躪っているのだ。

「タマちゃん、若返ってる……」

牢獄の中、タミー・オロチの視野からスクリーンに送られてくる映像を見つめながら、タミーは表情を曇らせた。

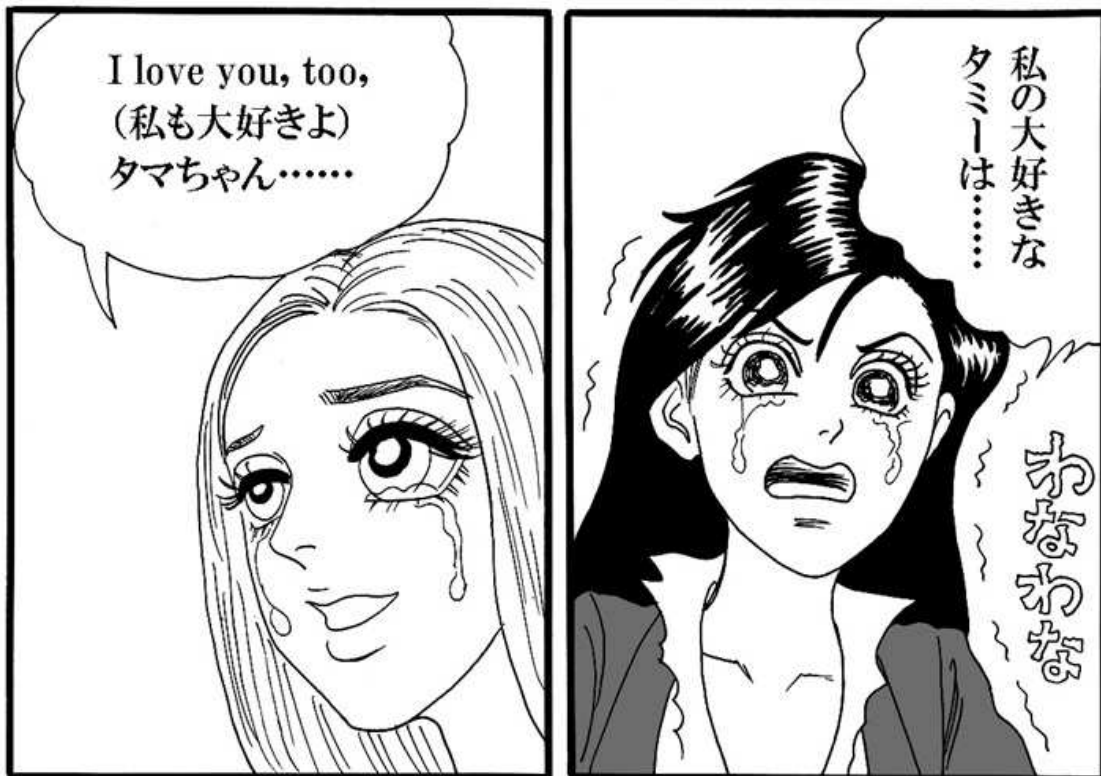
『半霊半物』になってしまったのね……奴の思惑通り……」

「私の大好きなタミーは、断じてそんなふしだらな女なんかじゃない！」

泣きながら叫ぶ珠美の顔が映し出された。

「私も大好きよ、タマちゃん……」

タミーの頬を涙が伝って流れた。



「それにしても遅かったじゃないの、タマちゃん」

ソファに腰を降ろしながら、タミー・オロチが言った。

「待ってる間、たっぷり充電したから、撃たれたところも全部治ってしまったよ。『扉』の向こうからこちらへ戻る時間は調節が利くはずだ。ダメージがまだ残っている数日前を選んだ方が君にとって有利なはずだが……それとも、ハンデなしでも勝てる自信があるということかな？」

タミー・オロチの目がギラリと光った。

「怪我が全快した状態で、傷一つないきれいな身体でタミーを取り返したかっただけよ」

「やはり勝てる気ではいるんだな！」

タミー・オロチの全身に殺気が漲り始めた。

「今や君も、死ぬ心配のない身体だ。手加減なんかしないぞ。それでも勝つ自信があると言い切るかね？」

「さあね。そんなこと、やってみなくちゃわからないでしょ？」

珠美の表情はあくまで平静で、瞳は澄み渡っていた。

「彼女素敵ね」

タミーの膝の上に座っているまりかが言った、ここがやはり精神の世界だからだろうか、タミーにはまりかの台詞が全て完璧な英語として聞こえる。

「でしょう？」

タミーは誇らしげに笑って胸を張った。

「私の一番の親友よ」



「上等だ。準備はいいのか？」

タミー・オロチはソファから立ち上がった。

「いつでもいいわよ」

珠美の両手に中小の剣が握られている。一方、タミー・オロチは両手が蛇の頭をした鞭のように伸びて撻った。そして、鞭の腕はびゅんと唸って四方八方から珠美に襲い掛かった。右手の中剣と左手の短剣を、順手と逆手を自由自在に切り換えながら、縦横無尽に閃かせて、珠美は敵の鞭の動きを悉く払い除けた。

「驚いたな！」

タミー・オロチは目を見張った。

「まさかここまで腕を上げていようとは！」

